

寺川郷談の原形について

広 田 孝 一

On the Original Form of Teragawa Local Story

Takaichi HIROTA

(昭和36和10月25日受理)

本稿は首題の目的のための一試論にすぎないのであるが、その結果として、寺川郷談の原形を、地元本である中越本“寺川狂談”ないしは小島本“寺川郷談”に求めることが可能ではあるまいかといおうとするものである。従来筆者が手にすることが出来た寺川郷談の諸本を比較校合した結果、次のように、田舎本と都会本の二つに大きく類別することが出来ると考えたい。

一．田舎本（郷本） 中越本，小島本

二．都会本 1．城下本……松岡本，小関本，桂井本，土佐国群書類従本，山内栄本
2．江戸本……三十幅本，橋詰本，山中本

上記のうち、郷本と城下本はすべて地元本であり、江戸本のうち、橋詰本・山中本も地元の手写本である。しかしなが、山中本は昭和十六年頃、その所蔵者山中登氏が、高知県土佐郡本川村役場において、愛媛県から伝わった刊本三十幅（国書刊行会編のものであろう）の中から手写し直したものであり、江戸本である。橋詰本は、原本を今次大戦の際焼失したと伝えるものであり、現在はガリ版刷のものを残すのみであるが、下記に紹介するように三十幅本である。

なお本稿において使用した寺川郷談は、昨年度の本誌拙稿“異本寺川狂談の発見と寺川郷談の成立過程について”において分類した仮称に従ったものであり、その十一種のうち、前文ともいうべき部分を欠く山内文庫本、皆山集本を除いた九種のものと、いま新しく、高知大学助教授吉野忠氏から見せていただくことの出来た仮称小関本の十種である。小関本は、同大学助教授小関清明氏の所蔵するものであり、同氏の御尊父が、かつて高知県立中央図書館長時代に求めおかれた、作者春木繁則と明記されてある貴重な手写本である。しかも、下記の表に明らかなように、松岡本とほぼ同一と思われるものである。あつく両氏の御厚意に感謝の意をささげたい。

以上の諸本を、その形式上から大別すれば、大要上記の分類となるが、地元本である城下本はさらに松岡本、小関本の系統と江戸本である三十幅本のいわば中間的なものとして、そのいずれかに属するものを共有しながら、そのいずれにも片よらず、それぞれ特異な部分を持って独立する桂井本、土佐国群書類従本、山内栄本の系統がある。この系統のものを、今一応、前記二系統の中間的なものといういい方をしたが、はたして中間的なものかどうか。むしろ前記二系統のものが発展、ないしは完成した形式のものというべきではあるまいかと考えている。

一. 前文にたいする疑義

ここにいう前文とは、以下引用する寺川郷談の最初の部分を指すものである。この前文は、下記するように、その一・その二の二つの部分から構成されている一群がある。それが都会本であり、前文その一を欠くものが田舎本である。したがって、多少の差異は認めらるゝとしても、中越本と小島本は同一系統と考える。また、前文その一、その二を共有する都会本は、相当の差異はあるにしても、都会本として大きく同一系統と見なしうるものであろう。ここで指摘しておきたい疑問は、二つの前文を持つことは、原形寺川郷談の姿ではなかったのであろう。おそらく、前文その二に見られる田舎本と都会本の差異は、この作品の題名を“寺川郷談”と号すると解説した後期の形式が加わったためであり、飛躍的ではあるが、宝永堂なる筆名が形成されるようになった時に、はじめて附け加えられたもの、極論するならば、春木氏の意図するものとは異なった部分が加えられているのではあるまいか。

二. 前文の異同について

以下論をすすめるために、次のような略号を用いる。

イ. 下記する前文の比較一覧表において、中越本は略号一、小島本は二、松岡本は三、小関本は四、桂井本は五、土佐国群書類従本は六、山内栄本は七、三十幅本は八、橋詰本は九、山中本は十とする。

ロ. 引用文にはそれぞれの語句に、前文その一、その二ごとに一連番号を附する。

ハ. 仮名の“者”（は）は、他と区別するために漢字“者”で表わす。

ニ. 文字の右肩 * 印は明らかに誤字あるいは誤脱と思われるものである。

ホ. 五の42 “所々”とあるは“文”の草書体を読み誤まったと思われるものである。したがって異質とは考えない。

ヘ. 略号六とした土佐国群書類従本は内閣文庫本である。かつて高知県立中央図書館にあった土佐国群書類従は今次大戦によって焼失し、上野図書館所蔵のものは未見である現在、その底本については正確を期しがたいが、内閣文庫本によった成城大学文庫所蔵のものには、脱落として数字があり、仮名ずかいにも異同がある。ほとんど同形式と思われる内閣文庫本、東大本、京大本にしても、完全なる一致を見ることは出来ない。このことは手写本の性格を物語るものとしてまことに興味深い。

前文 其一

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
一																			
二																			
三	御状	致拝見	候	然ハ本川郷ハ	山分之中にても殊に奥山に付	人	の暮	も											
四	御状	致拝見	候	然ハ本川郷ハ	山分之中にても殊に奥山に付	人	の暮	も											
五	御状	被下致拝見	候	然者本川郷者	山分之中にても殊に奥山ニ付	人	の暮	しも											
六	御状	致拝見	候	然者本川郷ハ	山分之中にても殊に奥山故	人	の暮	も											
七	御状	拝見いたし	候	然者本川筋ハ	山分之中にても殊に奥山ニ付	人々	之暮	も											
八	御状	拝見いたし	候	然者本川筋ハ	山分の内にても殊に奥山に付き、	人々	の暮	も											
九	御状	拝見いたし	候	然者本川筋ハ	山分の内にても殊に奥山に付き	人々	の暮	も											
十	御状	拝見いたし	候	然者本川筋ハ	山分の内にても殊に奥山に付き	人々	の暮 [*]	しも											
	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33					
一																			
二																			
三	他所に更	たる事も有	之様に御聞被	成	其	荒ましを申こせと被	仰越	候へとも											
四	他所に更	たる事も有	之様に御聞被	成	其	荒ましを申こせと被	仰越	候へとも											
五	他所に更	たる事も有	之様に御聞被	成	其	荒増	を申越せと被	仰越	候得共										
六	他所に更	りたる事も有	之様ニ御聞被	成	其	荒増	を申越せと被	仰聞	候得共										
七	他所に更	りたる事も有	之様に御聞被	成	其	荒増	申越と被	仰聞	候へとも										
八	他所に更	たる事も有	之様に御聞被 ^レ	成、其	荒増	を申こせと被 ^ニ	仰聞 ^ニ	候へども、											
九	他所に更	たる事も有	之様に御聞被 ^レ	成、其	荒増	を申こせと被 ^ニ	仰聞 ^ニ	候へども、											
十	他所に更	りたる事も有 [*]	之様に御聞被	成	其 [*]	荒増	を申こせと被 ^ニ	仰聞 ^ニ	候へども										
	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49			
一																			
二																			
三	公務にいとまなく	御返事延引いたし	候	中々ふみにて事たるましく	候	けふ	ハいたく												
四	公務にいとまなく	御返事延引いたし	候	中々ふみにて事たるましく	候	けふ	ハいたく												
五	公務ニいとま無	御返事延引致	候	中々所々 [*] にて事たるまじく	候	きよふ者いたく													
六	公務にいとまなく	御返事延引		中々ふみにて事たるましく	候	けふ	は												
七	公務にいとまなく	御返事延引いたし	候	中々文	にて事たるましく	候	けふ	ハ											

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19									
三	比は寛延辛未衣更							高知	を出て		土佐の邊鄙		本川郷寺川の庄村々を							かけ								
四	頃 比は寛延辛未衣更							高知	を出て		土佐の邊鄙		本川郷寺川の庄村々を							かけ								
五	比は寛延辛未衣更							高知	を出て		土佐のへん鄙		本川郷寺川の庄村々を							かせ*								
六	比は寛延辛未の衣更著							宿	を出て		土佐の邊鄙		本川郷寺川の庄村々を							かけ								
七	頃 比は寛延辛未の衣更著							土陽	を出て		土佐のへんひ		寺川郷寺川の庄村々を							かけ								
八	比は寛延年末の衣更著							宿	を出て		土佐の邊鄙		本川郷寺川の莊村々を							かけ								
九	比は寛延年末*の衣更著							宿	を出て		土佐の辺鄙		本川郷寺川の莊村々を							かけ								
十	此は寛延年末*の衣更著							宿	を出て		土佐の邊鄙		本川郷寺川の莊村々を							かけ								
	20			21			22		23		24		25		26		27			28								
一	廻り足曳の山廻りとて淋しき																											
二	廻りあし引の山廻りとて淋しき																											
三	まはり(二字画の空白)公家の御用者しをも執行なふおりしも																											
四	まはり(同上)公家の御用者しをも執行なふおりしも																											
五	まわり(同上)公家の御用者しをも執行のふおりしも																											
六	まはり(同上)公家の御用者しをもとり行ふ折しも																											
七	まはり(同上)公家の御用はしをもとり行ふおりしも																											
八	まわり、公家の御用はしをもとり行ふ、おりしも																											
九	まわり、公家の御用はしをもとり行ふ、おりしも																											
十	まはり公家の御用はしをもとり行ふ、おりしも																											
	29		30		31		32		33		34		35		36		37		38		39		40					
一	山家之住居				春もさへかゑり				けふは弥生之三日なれと片山里				は				季候				おそく				桃李			
二	山家 住居				春もさへかゑり				けふハ弥生之三日なれと片山里				ハ				気こふ				おそく				桃李			
三	山家のすまひ				春も寒 ^{サエ} 帰 ^{カヘリ} り								おのづから				片山里なれ者 ^キ 氣候 ^{カッ} 遅 ^{ソフ} く				桃李 ^{トフリ}							
四	山家のすまひ				春も寒 ^{サエ} 帰 ^{カヘ} り								おのづから				片山里なれハ				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く				桃李 ^{ソフ}			
五	山家のすまい				春もさゑかゑり								をのづから				片山里なれば				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く				桃李 ^{ソフ} *			
六	山家のすまひ				春も寒 ^{サエ} 帰 ^{カヘ} り								おのづから				片山里なれハ				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く				桃李 ^{ソフ}			
七	山家のすまい				春も寒 ^{サヘ} 還 ^{カヘリ}								おのづから				片山里なれハ				氣候 ^キ おそし ^{カッ}				桃李 ^{ソフ} *			
八	山家のすまひ、				春も寒				ふ、				おのづから				片山里なれば、				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く、				桃李 ^{ソフ} *			
九	山家のすまひ、				春も寒				ふ、				おのづから				片山里なれば、				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く				桃李 ^{ソフ} *			
十	山家のすまひ				春も寒				ふ				おのづから				片山里なれば				氣候 ^キ 遅 ^{カッ} く				桃李 ^{ソフ}			

	41	42	43	44	45	46	47	48									
一	いまた開　　す					物淋しき折柄		友なる人の元　より文　来　て本川の									
二	いまた開　　かす					物淋しきおりから		友なる人のもとより文の来りて本川の									
三	いまた開　　かず		猶	楽	みもなく居る折		から										
四	いまだ開　　かす		猶	楽	みもなく居る折		から										
五	いまだ開　　かず		猶	楽	みもなく居る折		から										
六	猶	開　　かず	何の楽		みもなく居る折		から										
七	いまた開　　かす		猶	楽	しみもなく居る折		から										
八	いまだひらかず、		猶	楽	もなくゐる折		から、										
九	いまだひらかず、		猶	楽	もなくゐる折		から、										
十	いまだひらかず		猶	楽	もなくゐる折柄 [*]												
	48					49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	
一	有増　　を知らせよとのことなれハ								見　　聞馴　　たること　　を								
二	あらましをしらせよとのことなれハ								見　　聞なれ　　し　　を								
三									おもひ出し御返事進候　聞および見及　　たる事								
四									おも [*] 出し御返事進候　聞及　　び見およびたる事								
五									思　　い出し御返事迄候　聞及　　見及　　たる事								
六									おもひ出シ 御返事進候　聞および見及　　ひたる事								
七									思　　ひ出　　御返事進候　聞及　　ひ見及　　ひたる事								
八									おもひ出　　御返事進候、聞および見およびたる事、								
九									おもひ出　　御返事進候、聞および見およびたる事、								
十									おもひ出　　御返事進候　聞および見およびたる事、								
	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73			
一																書しるして送　　ぬ	
二																書記　しておくりぬ	
三	唯時の戯 ^{タムレ} れ		茶のみはなしの隙			に	寺川郷談 ^{ケン} と題号して書付									進候	
四	唯時のたハむれ		茶 [*] はなしの隙			に	寺川郷談と題号して書付									進候	
五	只時のたわむれ		茶吞　　ばなしのひまニ			寺川郷談とごふして書付									進候		
六	只時の戯　　れ		茶のみ咄　　しの隙			に	寺川郷談と題号して書付									進候	
七	唯時の戯　　れ		茶吞ミ嘶　　の隙			に	寺川郷談と題号して書付									進候	
八	只時の戯気		のみ、			はなしの隙　　に、		寺川郷談と題號して書付									進候、
九	只時の戯気		のみ、			はなしの隙　　に		寺川郷談と題號して書付									進候、
十	只時の戯気		のみ			はなしの隙　　に		寺川郷談と題號して書付									進候

	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
一											
二											
三	御覧	の	後ハ帯の中入	腰者 ^ろ	りに用ひ給ひたり	共			さまたげあらし		
四	御覧	の	後ハ帯の中入	腰者 ^ろ	りに用ひ玉ひたり	とも			さまたけあらし		
五	御らん	の	後者帯の中入	腰者 ^ろ	りに用い給ひたり	とも			さまたげあらじ		
六	御覧	の	後ハ帯の中入	腰者 ^ろ	りに用ひ給ひたり	共			さまたけあらし		
七	御覧	候	後ハ帯の中入	こし張 ^{本ノマフ}	に用ひ給ひる申れ共				さまたけあらし		
八	御覧	の	後は帯の中入、	腰ばり	に用ひ給ひたり	とも、			さまたげあらじ、		
九	御覧	の	後は帯の中入、	腰ばり	に用ひ給ひたり	とも、			さまたげあらじ		
十	御覧	の	後は帯の中入	腰ばり	に用ひ給ひたり	とも			さまたげあらじ		

上記前文の比較一覧表において明らかであるように、前文その一においては、一・二はこの部分を欠き、前文その一を共有する三以下において、1, 4, 5, 7, 10, 13, 15, 20, 22, 26, 30, 34, 35, 37, 38, 41, 43, 44, 46, 55, 62, 63, 66の部分は完全に一致し、さらに、3, 18, 16, 17, 31, 39, 40, 49, 50, 56, 70を除いては、基本形を共有する形式的差異にすぎない。したがって、一、二は同一系統であり、三以下十まではこれと対立する同一系統として二大別出来る。これが当初において述べておいた田舎本（郷本）と都会本（城下本と江戸本）の二大分類である。この二大別は、前文のみに限らず、全文にわたっての顕著な特徴である。本稿において、寺川郷談の原形を追求しなければならないと考えるのも、この田舎本である異本二冊の価値如何を知りたいための試論にすぎない。さらに前文その二においては、9, 10, 17, 31, 36, は十本とも完全に一致し、3, 6, 19, 20, 29, 30, 38, 39, 40, 42, 43, 47, 58, 71, 73も同質の差異にすぎない。したがって、前文その二に関する限り、田舎本・都会本とも、ある種の共通点を見出すことができる。このことは、前文その二の部分は、寺川郷談作製の当初から、その構想の中にあつた部分を含むものとの解釈が可能なのではあるまいか、前文その二において同一系統と見た都会本、すなわち三以下十までのうち、これら八本が完全に一致する部分は3, 7, 9, 10, 11, 13, 15, 17, 18, 19, 22, 23, 27, 29, 30, 31, 34, 36, 38, 48, 51, 53, 54, 56, 58, 59, 61, 68, 70, 71, 73, 77であり、異質である4, 5, 8, 14, 21, 32, 33, 41, 44, 52, 64, 75を除けば、すべて同質の少差である。すなわち前文その二においても、田舎本の二本と、三以下の八本である都会本は別系統の一群として、それぞれ一括しうること前文その一場合同様である。

何故にこのような相違を生むかについては、さらに稿を改めなければならないが、一つには誤写からくるものがあるろう。その好例として、あえて江戸本の三種を併記しておいた。先述したように、略号八は国書刊行会編（1917. 8. 25）の刊本三十幅によるものであり、十はそれからの再手写本である。九はその原本を失いその正確を期しがたいが、句読点・返り点を持つほか、ここでは詳述をはぶくが、細部にわたる比較校合の結果、明らかに刊

本三十幅によるものであった。この刊本の手写にあたって、前記引用文一覧表に*印を附しておいた誤写が、同質のものにおいて十六箇所、異質のものにおいて、前文その一の62、前文その二の1, 4, 40を生じている。このような誤字が、往々にしてありがちである一例として、前文その二の40“桃李”を“桃季”と誤まった場合をあげてみたい。この誤写は、江戸本のほかに、地元本の五、七にも見られ、さらに専門家の監修になると思われる、六の一種である京都大学本にもこの例が見出される。さらに細かく、仮名遣いの上から見れば、前文その一において、下表のような相違が出てくる。

	一 連 番 号	内 閣 文 庫 本	東 大 本	京 大 本
前 文 そ の 一	11	之	ノ	ノ
	14	ニ	に	に
	48	は	ハ	ハ
前 文 そ の 二	49・50	おもひ出シ	思ひ出し	思ひ出シ
	73	進候	進し候	進し候

この場合、50の例はまことに興味ある問題を提供することになろう。すなわち、内閣本・京大本の示すように、“シ”は漢字の読み方を示す送り仮名から、東大本の“し”への移行となること、表記73の場合と同様と考うべきではあるまいか。この見解が是認せらるるならば、記録的には最古である江戸本の、上記49・50における“おもひ出”の読み方もおのずから一定してくるであろうし、この部分の原形が江戸本に見出されるという、当然の帰決が是認されよう。いずれにしろ、手写の間における手写者の独自の見解、創意工夫の余地は、こうした細かな点においても生ずるものであることは許されたいと考えたい。ただ本稿においては、田舎本のうち、小島本は全体として中越本に比して雅文体であることを指摘するにとどめ、都会本が、二系統の城下本と江戸本という、合計三系統に類別せられることを例証して、首題の要求にこたえたいと考える。

I. 田舎本と都会本の異同について

1. 田舎本は前文その一を欠く。

2. 前文その二においても、田舎本にあって都会本にはなく、都会本にあって田舎本にはこれを欠くなど、相当の差異は認められる。またその部分を共有するかに見えても、3, 5, 8, 32, 46は異質である。したがって、田舎本と都会本は、それぞれ相対応するものを共有しながら、明らかに異種の系統に属するものである。

II. 松岡本・小関本と三十幅本の異同について

略号三・四の松岡本と小関本は、小関本の誤写と思われる前文その二の49, 64のほか、文字の種類を異にするのみの11箇所を除いては完全に一致する。したがって、そのいずれかに基本型を見出すとならば、他種のものと比較から、松岡本がそれであると考えた

い。この城下本の二本と、江戸本を比較した場合、城下本のうちの他系統五・六・七が、江戸本と共有することがある、いわば江戸本の特徴ともいべき次の部分を、城下本の三・四は欠く。すなわち、前文その一における

$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccc}
x & & x & & \overset{OV}{\Delta} & & \overset{OV}{\Delta} & x & & & & x & \overset{OV}{\Delta} & & & x & x & & x & \overset{OV}{\Delta} \\
3 & 6 & 8 & 9 & 11 & 12 & 16 & 17 & 23 & 25 & 27 & 31 & 33 & 45 & 48 & 49 & 50 & 54 & 56 & 58 \\
\overset{OV}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & & & & & & & & & & & & & & & & & \\
68 & 69 & 70 & & & & & & & & & & & & & & & & &
\end{array}$

前文その二における

$\begin{array}{cccccccccccccccccccccccc}
\overset{O\Delta}{\Delta} & x & & \overset{O\Delta}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & & \overset{OV}{\Delta} & x & & \overset{OV}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & \overset{O\Delta}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} & \overset{OV}{\Delta} \\
4 & 5 & 6 & 8 & 16 & 20 & 21 & 26 & 32 & 33 & 37 & 45 & 50 & 60 & 62 & 63 & 64 & 76 & 78
\end{array}$

である。同じく都会本に属するにしても、この差異の生れてくる理由はいずれにあるものであろうか。上記の一覧表にある表記○印は江戸本にのみの形式であり、これに加えられた△印は、松岡本と同質のもの、△印は異質のものであっての差異を示す。同じく×印は松岡本とは異質であって、しかも江戸本の特徴を示すと考えられるものであるが、五・六・七の城下は、そのいずれかにおいてこれを共有することがあることを示すものである。江戸本は記録的には最古のものであり、一応これに比較の標準をおいたものがこの表である。この表に現われた結果として、前文その一における江戸本と松岡本（三）の差異には、同じく城下本である五・六・七が、江戸本と異なる部分が少ないのに対して、まことに大なるものがあるといわなければならない。このことは、五・六・七の城下本が、江戸本に対しての近似性をより多く持つに対して、城下本の三・四は、江戸本に対する近似性がまことに少ない系統といえよう。前文その二においては、五・六・七の城下本の持つ、江戸本への近似性は少くはなっているがなお存在し、五・六・七が江戸本と三・四の中間的存在であることを示すものといえよう。しかしながら、上記の表の二つは、これを総合した場、前文その一においては、城下本と江戸本の差が明確とはならないが、前文その二においては、○印の江戸本のみの形式が差異として大きく、加うるに、前文その一における、江戸本のみが持つ異質なるもの一に対して、これが七を数える。すなわち、前文その二においては、地元の城下本と江戸本の差が、まことに顕著であることを示し、ここに、底本を同じくしながらの創意工夫のあとが見られるというものであるまいか。すなわち、前文その二における大なる差異は、江戸本において、“寺川郷談と題号する云々”の解説を加え、その文体をととのえようとした作意からの混乱であり、そこに江戸本の特質があるとともに、この書の本来の題号“寺川狂談”がともすれば埋没しようとした理由を見出すものである。前文その一に、さほど大きな異質の差異のないのは、江戸において、原本になかったこの部分が完成し、しかる後に土佐に流布したと解すれば、前文その一と前文その二における異同の大小に、差があることにも合理性が考えられ、ここに首題にいう“寺川郷談”の原型にたいする追求も、一步前進をみる事が可能であると推断したい。

III. 桂井本・土佐国群書類従本・山内栄本の形式について

略号五・六・七の上記三本については、紙数の制限により、詳細なる分析を省略するが、前記引用文一覧表から判断せられるように、江戸本類似の点もあれば、松岡本・小関本類似のものもある。しかしながら、そのいずれにも属せず、三本それぞれ独自の形式を持つ特殊なる一群である。決論として、いずれかといへば、桂井本（五）は松岡本（三）

に近く、土佐国群書類従本（六）・山内栄（七）は江戸本に近いが、この中でも、山内栄本はさらに江戸本に近い。しかしながら、上記のように、それぞれ独自の形式を持つ、いわば、松岡本と三十幅本の中間的、というよりは雑種的なものとして、地元本の発展過程をまことによく示すものであろう。桂井本は雑種中の雑種であり、特異な形態がもっとも多く、山内栄本はこれに準ずる。

三. あ る 結 論

これら種々の異同が、作者春木繁則の、この書完成の途上における粗稿の残存によったものか、あるいは、ある底本を手写する間に、参考に供した異本からの影響を蒙ったものであるかについては、その推断を下し得ないが、上記中間型ないしは雑種型と分類した城下本の一群には、諸種の異本を資料として、後世の手写の間に補訂したあとをうかがい得ると考える。この補訂のあとを、田舎本のうち、中越本に見る“他国山盗人”の記事によって例証したい。すなわち“山家の童べは其所に馴染て人里遠き山の奥かるものごとくなるたやのうちにて暮しける（予九年前のことなりし此郷名野川と云所ニ御山番所ありテ勤けるに…耳塚という所は先年盗人の耳を埋し處也という）かくて種子刈り終りてた家にて実となし…”の記事は、（ ）の部分の後世の異本による補訂として省略する方が、文章としてはるかに自然ではあるまいか。しかも、同じく田舎本である小島本はこの部分を欠く。この部分は、田舎本には共に欠けている日本の立場からの博引傍証とともに、非土佐的なものとして、田舎本が特に省略したとの見解も考えられるが、筆者はあえて、他国山盗人の記事が前後の関連よく本文にとり入れられている都会本は、後世の完成期の形式を示すものと見解に立ちたい。たとえば、前文その二の8、9、10の一句を比較した場合、同じく11の有無とともに、中越本は土佐的であり、都会本は日本的な表現である。特に六・八の“宿を”は、その後に続く“土佐の”という字句との重複を避けたための技巧の一つと判断したい。また、前文その二における3の“宝曆”と“寛延”は、この年の十月に寛延と改元されたことからすれば、その春は“宝曆”と表記することが自然ではあるまいか。

以上まことに部分的な資料からではあるが、寺川郷談の原型は、その古称（寺川狂談）を残存するものとしては最古（文政十三年）の中越本の系統、すなわち、田舎本（郷本）として大別されるものの中に求められうるとは考えられないものであろうか。

（高知女子大学 史学研究室）